

知識を詰め込む授業も、
工夫次第で学生の反応はどんどん変わる。
それが面白い

資格試験関連科目は、教えるべき知識が多くて応用の余裕がない

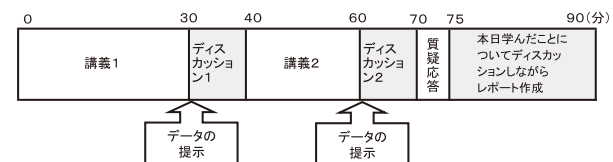
大学の講義の多くは体系的な知識を学生に教授することが目的であると考えられています。講義ではその分野で必要な基礎的な知識から先端的な研究まで、教えたいこと・教えないことが限られることが多く、そうなる準備された内容を全て語るのが精いっぱい、「社会人基礎力」を高めたとしても、他の活動を挟む余裕はない、というのがよく聞かれる意見です。特に、専門教育の資格試験の関連科目では、決められた内容を全て教える必要があります。さらに、授業の中で「社会人基礎力」を発揮する場面を作るためには、事前学習をして授業に臨むことが重要ですが、学生は受講しなければならない科目が多く、事前学習を課するのは負荷が大きすぎて現実的には難しいのです。

岐阜大学応用生物科学部（獣医学課程）の福士秀人教授は、専門知識の習得を目的とする科目で、「課題発見力」や「創造力」、「チームで働く力」などを高める工夫を行っています。獣医学は進歩が著しく、病気を一つずつ扱っていると、「百科事典を1ページずつ読んでいくような授業」になりがちです。獣医師の国家試験のためには、必要な知識の暗記が必須ですが、一方で実際の治療の現場では、いくつかの病気が重なっていることを発見したり、似たような他の病気と区別したりするために、網羅的に学んだ知識を柔軟に組み合わせる創造力も必要で、丸暗記だけでは通用しません。またイヌやネコなどの「伴侶動物（ペット）」を家族同様に扱う人々も増えており、獣医師の人間性の重要性も増えています。

集中が途切れる時間帯での話し合いが、創造力も育てる

さまざまな試行錯誤の末に福士先生が最近取り入れたのは、講義の途中でデータをどのように考えるかを学生同士で話し合い、学んだ知識を応用する時間を設けることでした。解説のために提示するデータをまず学生に自由に読み取らせ、席の近い学生同士3〜4人でディスカッションさせることを組み込むだけで、取り組みが大きく変化するのです。さらに先生は、一方的な講義に対する学生の集中力は、20〜30分で著しく低減すると言われる点に着目し、このタイミングでデータを提示するようにしました。すると授業への集中度が増し、より内容のあるディスカッションが生まれるようになりました。ディスカッションは10分程度で、その間先生は机間巡視をして、学生のディスカッションに声をか

『獣医感染症学』の授業の進め方



けます。学生は一人では手を挙げにくくても、数人で話しているところに近づいていけば、質問しやすいことに気付いて、取り入れた手法の一つです。ディスカッションが終わるとさらにいくつかの症例を説明し、その後別のデータを提示して再びディスカッションを行います。質問を向けると、先生も予想しなかった点に学生の考えが及ぶこともあります。このディスカッションでは「正しい答」を求めるのではなく、学生に疑問を持たせて、知識を学ぶ際に考える視点を獲得させることが目的です。講義内容に関係のあるデータの解釈を行うことで、学んだ知識をその場で応用して考える場が与えられ、知識の習得とともに、治療の現場や研究に必要な「課題発見力」や「創造力」、さらに「発信力」「情況把握力」など「チームで働く力」を発揮することができます。

そして授業の最後に20分ほどかけて、当日学んだことをレポートに記入しますが、このときも近くの席の2～3人で相談しながら書くように声をかけます。話し合いながら書くことで、学んだことを確認したり、自分にはなかった視点に気付いたりして、理解がより深まります。このときも先生は机間巡視をして学生の質問に答えます。このように、細かくグループ活動を挟み込み、互いに学んだことを確認し合う小さな承認を刻むことは、他者への信頼やコミュニケーション力、自尊感情も育てることになり、また覚えることと考えることを一体化して、さらに多くの知識を獲得する能力も身に付きます。常に発展し続ける学問の知識の全てを授業で教えることはできないからこそ、学生に自ら学習する力を付けることも大切なのです。

「私は今、獣医微生物学の総論・各論と、獣医感染症学を担当しています。獣医微生物学総論は、国家試験の必須科目なので教えることが多く、かつては90分間一方的に話をしていましたが、こちらの自己満足に終わっている感じでした。それで1時間話をして、30分レポートを書かせるというパターンもやってみましたが、まだ足りないものを感じました。動物の病気の事例を見せようと、ビデオを使ったこともありましたが、学生の授業評価で『手を抜いている』と酷評されてしまいました。授業を柔らかくしようと冗談を織り交せることが多いのですが、名指しで『真面目に授業をしてください』と批判されてしまったこともあります。授業評価は、授業終了後に行われますから、書いた学生に答を返すことができません。こちらの意図を説明できず、批判されるだけで終わってしまって、悔しくて1週間くらい眠れないこともありましたね」

「でもそれも含めて、工夫をしてみると、学生の反応が面白いのです。彼ら彼女らには悪いかもしませんが、毎回実験しているようなものです。いろいろ試して、効果があったなとか感じていきます。私は誰かがやっているのを聞いてヒントはもらいますが、自分で考えて工夫してやっています。今の方法は、学生同士が話し合えるかどうか心配しましたが、慣れてくると学生の方から『もっと話し合う時間を取ってほしい』と言ってくるようになりました。質問もよく出るようになり、『人と話すのが苦ではなくなった』という学生もいます。やり方次第で、学生が変わるのがよくわかります。もっと詰め込みが必要な場合でも、工夫次第で、知識を習得させつつ『創造力』や『チームで働く力』を高めることができると思います」